

仁科記念財団

案 内

1989年6月

財団法人 仁科記念財団

仁科記念財団案内

まえがき

仁科記念財団は1955年に戦後いちばん早く学術振興財団として、わが国の原子科学の祖、仁科芳雄博士を記念して創立されましたが、そのとき以来毎年仁科記念賞の贈呈と定例仁科記念講演会をおこなっています。財団の設立当初の基金は、わが国財界からの寄付金2165万円と内外学界の個人からの寄付金334万円とから成るものでしたが、数年で使いきってでもその活動を有意義なものにする覚悟でした。もちろん、仁科記念賞は永続を希望したのですが、朝永振一郎博士（当初財団常務理事）らをはじめとする学界関係者の努力による活発な活動と、初代理事長渋沢敬三氏その他財界のかたがたのご配慮により、財団の意義が広く認められ、その後数次の募金によって、今日ではほぼ5億円の基金をもち、その利子で活動できるようになりました。

さて、資金面では、上に述べたような状況ですが、財団の存在の意義が広く認められ続けるためには、学界からの支持と協力が必要であります。そして実際、今日まで活動を続けることができたのは、古くからの財団関係者以外の、また財団法人の理事会、評議員会には席をもっておられない多数の研究者諸氏の、協力のおかげであります。

そのような支持と協力をこたえ、さらにその輪をひろげることを念願して、われわれは4年前から、「仁科記念財団案内」という小冊子を広く配布することにいたしました。それ以前には、講演会の記録を載せる広報誌NKZに、理事会、評議員会に提出する「事業報告および収支計算書」の内容の一部を付記するようになってきたのですが、それだけでは、講演記録に興味をもって購読なさるかたとか、講演会を聴きに來られるかた以外に対して、財団の広報がゆきとどきません。

この小冊子の「案内」という名まえは、戦前の財団法人理化学研究所が出していた同様な小冊子にあやかるものです。戦前の「理研」は、欧文と和文の研究報告の出版のほかに、毎年、各研究室の研究題目と所属研究者全員の氏名を記した質素な

小冊子を出していました。それには「寄附行為」という名の、ほかの法人では「定款」と呼んでいるものに相当する文書も掲載されていました。それにつけられていた「理化学研究所案内」という、かざり気のない名称は、当時の「理研」の気風をよく表していたように思います。それにならって名づけたこの小冊子が、すこしでも多くのかたに、仁科記念財団に対して親しみをもっていただき、支持者になっていただくのに役立てば幸いと存じます。

目 次

§ 1. 仁科記念財団はつぎの事業をおこなっています	1 頁
§ 2. 仁科記念賞について	2 頁
§ 3. 仁科記念研究奨励金について	3 頁
§ 4. 仁科記念講演会について	4 頁
§ 5. 財団出版物の普及にご協力ください	7 頁
§ 6. 仁科記念財団の活動——昭和 63 年度——	8 頁
談話室	14 頁
「財団法人仁科記念財団設立趣意書並びに寄附行為」(抄)	27 頁
役員名簿	33 頁

§ 1. 仁科記念財団はつぎの事業をおこなっています

1. 仁科記念賞贈呈

広義の原子物理学とその応用を中心とする研究分野における卓越した業績に対して銀メダルおよび副賞を贈呈します。

2. 仁科記念講演会の開催

ひろく原子物理学とその応用を中心とする学術の進展に関連し、かつ一般の関心事にもつながる諸問題を内容とした定例の記念講演会および同じ趣旨の地方講演会を開催します。

3. 仁科記念文庫の運営

当初は仁科博士の蔵書および寄贈によって追加された多量の図書を根幹としていましたが、現在は、仁科記念室および朝永記念室にある多数の貴重な資料の整理を主としており、その成果を広く利用しやすくするための作業をおこなっています。

4. 仁科記念研究奨励金の贈呈

- a. 小規模国際シンポジウム開催を援助し、
- b. 在外研究をする若い研究者に1年間の滞在費および旅費を支給します。

5. 外国のすぐれた学者の招聘

諸外国の指導的な科学者を招いて講演を依頼し、かつ我が国の研究者と交際し、討論に参加してもらいます。

6. 広報および調査

広報誌 NKZ その他講演記録等の出版、および仁科博士をめぐる科学史資料の収集調査をおこなっています。

§ 2. 仁科記念賞について

仁科記念財団の古い出版物,たとえばNKZの創刊号には,仁科記念賞についてつぎのように書かれています。

「仁科記念賞は,原子物理学およびその応用の分野できわめて優秀な成果をおさめた研究者に贈るものであります。この賞の特色は,功成り名遂げた大先輩に贈られるのでなく,むしろこれからの活躍を大いに期待される若い研究者に贈られる点にあります。」

いろいろな賞が設けられるようになって現在の現在,仁科記念賞がここに示されている特色を失わないようにしようという方針は,当然でありましょう。この文面には,はっきりしないところがあることは否めません。しかしいかに表現を詳細にしても,結局それは実例で示すことには及ばないということも真理であります。それで,1985年版の「案内」では,特に記念賞について述べることをしませんでした。

ところが,候補者の推薦を依頼するかたの範囲の拡大につれて,若いかたのなかには,業績の蓄積を重視して,先輩を推薦なさるかたもあり得ることと考えます。いままでの受賞者の名を見ても,受賞当時の年齢を思いうかべることは若いかたにはできるとは限らないからです。

そこで,「若い」ということと,「応用」ということについて,どのように考えるべきかについて,アンケートで意見を求めました。かなりのかたから回答があり,「若い」という点については,年齢制限を明示されたかたもありましたが,上述の文面の常識的解釈でよいとするのが大勢のようでした。

「応用」という字句は,基礎科学における原子物理学の応用という解釈が大勢でした。今日では,物理学の全分野が原子物理学に無縁でないから,受賞の対象とする分野は,単に「物理学」とすればよいという意見もありました。境界領域の研究の重視のために,物理以外の領域を,輪番的に物理と組みあわせてその年の受賞分野とするという案について意見をたずねたのに対しては,ほとんど全員が反対と答えられました。どの分野にかぎらず,独創的な研究があらわれたら,受賞の対象と

すべきだというわけです。その意味では、候補者の推薦も、なるべく広い範囲のかたにご依頼するのがよいし、推薦された候補の数が増すと、選考の仕事もそれだけ大仕事となります。そのことを考慮して、推薦の締切を1カ月はやくして8月末日とした次第です。推薦依頼状がとどきましたら、ご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

§ 3. 仁科記念研究奨励金について

この研究奨励金は、最近は、小規模国際研究集会の助成と、わが国の若い研究者の海外での共同研究への援助にあてられています。

1985年版の「案内」に書きましたように、この奨励金は1979年度までは個人研究に対し毎年数件の助成をおこなってきました。将来性のある研究に対して少額ながら効果的な、いわば「呼び水」的な役割を果たしたものですが、1980年度に、当時の財団の財政的事情にかんがみて、いっそう効果的と考えられる小規模国際研究集会の援助に切りかえて、個人研究への援助は停止しました。その復活もたしかに望ましいことですが、独創的な研究の芽を育てると同じ役割が小規模国際研究集会によっても果たされることを期待しておる次第です。

小規模国際研究集会の助成は、つぎのような二通りの手続によっておこなっております。一つは仁科記念賞候補者の推薦をお願いするのとおなじ範囲のかたがたに財団から依頼状を送り、推薦していただきます。推薦者に、計画の詳しい記述までをお願いすることは実際的でないと考えますので、早目にとにかく推薦をしていただき、それによって申請者に書式を送って具体的計画を記述していただきます。もう一つは、学会誌の欄を利用する公募です。「小規模」国際研究集会というものの定義は、総経費（参加費を除く）500万円程度までのものとします。そしてその申請に対して仁科記念財団から200万円以内の助成をおこないます。

研究者の海外での共同研究への援助について述べますと、仁科記念財団が派遣する研究者は、単なる留学生というよりも、派遣された先の国でおこなわれる国際共

同研究の重要なスタッフとなっております。そして仁科記念財団から派遣されたということが、先方の国の大学や研究所に助手等の形で就職した場合にくらべて、ずっとよく研究能率をあげるのに役立つというのが、いままでの海外派遣研究者の多くの人の声であります。

海外派遣研究者は公募して選考します。公募の主旨が若い研究者に徹底するように広報にご協力をお願いします。応募されるかたには、財団から選考にあたって参考にするためにご意見を伺うことのできる数名のかた（いままでの指導者および同僚）を指名してもらいます。滞在期間は1年とします（優秀な応募者にすこしでも多く機会を提供するため、そのように改めました）。なお年齢が35歳未満であること、在職者のばあいには所属機関の承認が得られることが必要です。

科学研究の国際協力が今後ますます重要性を増すことを考えますと、仁科記念財団の上述の二つの助成の意義をことに若い研究者が深く理解し、それを活用するとともに、自らもその事業の発展に積極的に寄与することが望まれます。

§ 4. 仁科記念講演会について

仁科記念財団は、仁科博士の誕生日にあたる12月6日の前後に、定例の記念講演会を東京で催すほか、地方講演、高校理科教員のための講演会、外国の著名物理学者の来日のおりとか朝永博士のノーベル賞受賞の際とかの特別講演会などを、随時おこなってまいりました。

定例の仁科記念講演会は、昭和63年度ですでに34回をかぞえました。学者の名を冠したこの種の講演会で古い伝統をもつものが、欧米にはいくつもあります。そのような講演会は、永続してこそ真価が発揮されます。つぎつぎに育ってくる新しい世代が聴衆に加わるよう、年長の世代がその講演会の存在を語り伝え、白髪の老学者が若い聴衆と一緒に講演を聴く、というようになってこそ、文化的な国の講演会と言えましょう。そのようになるためには、永続すること、伝統が作りあげられることが肝要です。

仁科博士は倦むことを知らない啓蒙家でありました。博士もはじめはジャーナリズムが大きらいで、新聞記者をケンもホロロに追い返したり、わざとむずかしいことを言ってけむに巻いたりするくせがあったのですが、サイクロトロン建設をやるようになってからは、あちこちで講演したり、新聞・雑誌に書いたり、すこしも労を惜しまぬようになり、その豹変ぶりにはアッケにとられたと朝永振一郎博士は語っています。これは、巨大科学の研究費を得るためだけではありません。一般社会に基礎研究の意義を理解させる必要を強く感じられたからでありました。そのような講演に、門弟たちはしばしば宇宙線用の大きなサイズの計数管を持ってお伴をさせられたものです。

仁科記念財団の二代目理事長であった朝永博士は、師の仁科博士におとらず公開講演に熱心でありました。朝永博士の独特な話しぶりは聴衆を魅了したものです。その名人芸とも言うべき話術は、落語を愛好したためと巷間伝えられていますが、もっと根本的には、博士があくまで直観的把握を重んじ、ものの考え方の本質を伝えることに努められたからであると言うべきでしょう。朝永博士が仁科記念講演会にいかにか熱心であったかは、33回の講演会のうち9回までの講演をみずから引き受けられたことにもあらわれています。朝永博士およびそのほかの講演者たちの名講演の記録は、財団の初代理事長渋沢敬三氏の熱心な意見に従って発刊された財団の広報誌「NKZ」に掲載され、バックナンバーでそれらを読むことができます。バックナンバーのうちでもことに注目をひいているのは、朝永博士のノーベル賞受賞講演の日本語版とも言うべき1966年6月の特別講演の記録の載った「NKZ」No. 7であります。その講演はストックホルムでなされた英語の講演よりも倍も詳しく「こくのある」ものであります(その号は需要が多くて、いちばん早く再版されました)。

朝永博士は1978年病におかれ翌年7月に他界されましたが、病床にあっても仁科記念財団のことを気かけられ、ことに記念講演会については、つぎのように言われました。

「仁科記念財団は社会に向かって開かれた窓を持たなくてはならない。記念講演会はその大切な窓の役割を果たすべきものだから、すくなくとも定例講演会は努力して続けるべきだ。随時の開催というのではルーズになりやすい。」

晩年、朝永博士は財団が準備するものとは別の、数多くの講演会で話をしておられましたが、仁科記念講演会については、そのような特別な意義を強調しておられたのです。

仁科記念講演会は、いろいろな大学と共同主催という独特な形でおこなわれています。かつては「朝日講堂」のような大講堂を借りて、不特定な世間一般に向かって広報して来聴を待っていたのですが、その方式では、世間が派手になったのに負けないだけの広報をすることがむずかしく、ことに学生諸君には徹底しないうらみがありました。

そこで、数年前つぎのような方式にきりかえました。仁科記念講演会を学生や若い研究者の層に広く知ってもらうために、いわば「拠点校」の大学を輪番にきめて、すくなくともその学生は来聴しやすいようにする。まず都内の大学のいくつかに順々にお願ひして会場を借り、その教授たちから学生に勧めてもらう。また他の大学の学生や若い研究者たちにも参加を呼びかけるという方式です。

この方式にしてから、すでに定例講演会を10回、そのほかに同じ方式の地方講演会を7回おこないました。幸いにして新しい方式は時宜に適していたと見え、どの講演会も、多数の学生聴衆を集めて盛大におこなうことができました。

大学と共同主催でおこなう方式の長所は、その大学の学生諸君が参加しやすいことのほかに、他大学の諸君を勧誘することによって大学間のかべを低くする効果が得られる点です。さらにまた、同窓生が顔をあわせる機会にもなるでしょう。こうして、貴重な伝統が育ちつつあるのですが、しかし、つぎの点も考慮する必要があります。まわり持ちで共催する大学が4つとか5つとかになりますと、当然一つの大学にとっては4年から5年の周期となり、そのあいだに学生がすっかり変わるだけでなく、教室員の異動もおこります。それゆえ、番に当たっていない大学でも、広報の点で協力していただき、それとともに、仁科記念講演会というものの意義について、新しい教室員に申しつぎをしていただくよう、ぜひお願ひ申しあげます。

§5. 財団出版物の普及にご協力ください

公開講演会は、仁科記念財団の重要な事業の一つですが、その講演会に来聴できなかった人のためにも考えるべきであり、講演記録をぜひ出版する必要がある、というのが、初代理事長故渋沢敬三氏の強い願望でした。また公開講演会について二代目理事長故朝永振一郎博士は、これは財団が社会に向かって開いている大切な窓だから、手をぬいてはならないという持論でした。われわれは講演会活動を活発にし、おこなわれた講演はできるかぎり記録を出版するように努力しております。そして出版されたものは、できるだけ多くの人々に読んでもらいたいと念願しております。

1. 個々のナンバーの有料頒布について

講演会の場合と同様、無料がよいという考えもあるかも知れませんが、無料で頒布すればよく普及するというものでもありませんので、有料といたします。そして、事務能力が不十分であることを考慮して、下記のようにしたいと存じます。

- (1) リストに載っているものを各冊一律に500円とする。
- (2) 郵送の場合、送料をリストに附記した概算で負担していただく。
- (3) 郵便振替を利用し、その用紙通信欄に、所属・職名等も記入していただく。

2. 図書館・図書室に置くことについて

仁科記念財団の講演記録シリーズも No. 29 にまで達しました。そして、古いものなかには、在庫切れで、再版をしたものもありますが、上述の有料頒布および財団関係者、寄附あるいは協力をしてくださったかたへの贈呈をした残りが、300部以上あります。これを死蔵すべきではないと考えて、大学や研究所のかたがたにつきのような内容のアンケート調査用紙をお送りして答えていただきました。

「仁科記念財団発行の講演記録の普及にご協力いただく方法」

- a. 図書館・図書室に有料で購入させる。
- b. 同様な出版物と交換する方式をとらせる。
- c. 無料で寄贈し、それを目のつくところに置かせる。

このアンケートに回答をいただいたかたのうちの2/3は、cにマルをつけてこら

れました。aを選ばれたかたは二十数名あり、またアンケート以前に大学に有料で購入させてくださった例も二、三件ありましたが、出版の本来の主旨からいって無料で多くの人の目にふれるようにすることは望ましいことですし、また、国立の機関のばあい、会計の手続が簡単でないこともありますので、cを選んだご意見にしたがうことにしました。bの「同様な出版物と交換する方式」を選ばれた回答はわずかでした。

上述のアンケートに対するご回答のなかに、「無料で寄贈」がよいが「但し、財団に大きな支出負担にならないなら」というご意見がありました。財団の出版物は形がはなはだ不揃いであり、合本にするというような新たな出費を要することはいたしません。しかし、郵送料はバカになりませんので、臨時の個人寄附でそれをカバーしていただければ幸いです。

結論を述べますと、図書館・図書室等に置いて、多くの人の目にふれやすくするために、無料で寄贈する、そして、そのことに賛成して下さるかたに、仁科記念財団への小口の寄附をお願いするということです。それとともに、もう一つお願いしたいのは、この講演記録シリーズに今後加えられるものについて、事情を知っている後継者をつくっていただくことです。図書の保管については、専門の司書に世話をやいてもらうこととなりますし、今後の寄贈についても、係の人に事情を知っていただく必要があります。記念講演会の共同主催についてと同様に、わかい教職員への申しつぎの点でご配慮いただきたいと思えます。

§ 6. 仁科記念財団の活動

— 昭和 63 年度 —

1. 仁科記念賞

本年度は下記 3 件の研究に対して贈呈した。

受賞者	名古屋大学理学部 教授 松本敏雄
研究題目	宇宙背景輻射のサブミリ波スペクトルの観測

推薦理由

1965年、宇宙からのマイクロ波が発見され、ビッグバン宇宙論の重要な根拠となっている。波長1 mm 以上で観測された領域では絶対温度3 Kの黒体放射のスペクトルに近いものとされてきた。しかし波長1 mm 以下のサブミリ波領域のスペクトルは宇宙初期から銀河形成に至る歴史を知る上で重要であり、その観測は久しく待望されてきたが、実験がむずかしいためにこれまで成功していなかった。

名大の早川研究室、アメリカ、バークレーのRichardsの研究室は協同してこの実験を行うため、超流動の液体ヘリウムで1.2K以下に冷却した集光器を周到な準備のもとに設計、製作し、宇宙科学研究所の観測ロケットK-9M-80に搭載して実験を行った。1987年2月23日のことである。サブミリ波領域の観測は成功し、3 Kの黒体放射スペクトルを上まわる強度を観測した。この結果は宇宙初期の状況を調べる上でその意義は極めて重要である。

松本氏はこの研究の計画、実験の遂行、解析に至るまで一貫して主導的に行ってきた研究者である。

受賞者 大阪大学理学部 教授 吉川 圭二

研究題目 ひもの場の理論

推薦理由

場の理論とは、相対論的に不変な無限自由度の量子力学のことである。

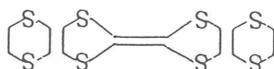
1930年代のハイゼンベルグとパウリの理論以来、相互作用する粒子ではなく広がったものの場の理論は吉川・Kaku両氏の仕事が最初である。両氏の仕事では特殊な座標系を用いるために、あからさまに相対論的不変性は見えていないが、結果的には不変であると考えられる。またひもが時間的に運動したり切れたり、再び結合したりして出来る面での確率振幅は、トポロジカルに同一視される面での一定の値をとらねばならないが、そのことも最近示されている。特に、閉じた、つまり端のないひもの場の理論としては、現在唯一の首尾一貫した理論であることも判明している。いずれにせよ多くの研究者に先駆けてひもの場の理論を構成し、後の研究者の手本となったことは非常に大きく評価されてしかるべきである。

受賞者 東京大学物性研究所 助教授 齋藤 軍 治

研究題目 有機超伝導体の新しい分子設計と合成

推薦理由

ある種の有機化合物の結晶が電気を流す性質をもっていることは以前より知られており、これを一歩進めて有機超伝導物質を創出する努力が積重ねられてきた。最初の成功はフランスのグループによってなされたが、このとき合成された有機結晶は一次元的性質をもち、約 1 K 以下で実現された超伝導状態はきわめて不安定であった。齋藤氏は、イオウなどの原子を適当に配置することにより、超伝導性を担う一次元的カラムの間に相互作用を導入して二次元的性格をもたせれば、上記不安性を解消することができるとの着想を得、これに基づいて BEDT-TTF (下記) をドナーとする錯体を合成、実際のこの化合物が安定な超伝導状態を持続することを示した。さらに陰イオンに NCS^- など直線状のものを用いることにより、超伝導転移点を 10K 以上に引きあげることに成功した。一群の BEDT-TTF の塩は Saito 塩と呼ばれ、国内のみならず諸外国からもっとも有望な有機超伝導体として注目を集めており、この分野の研究の今後の発展にも重要な役割を果たすものと期待される。



bis (ethylenedithio) tetrathiafulvalene

2. 仁科記念講演会

本年度は次の記念講演会を開催した。

a. 1981年度ノーベル物理学賞受賞者シーグバーン教授を招いての講演会

日 時 昭和63年 4月 4日(月)午後 3時～ 4時30分 (開場 2時30分)

場 所 東京大学理学部化学本館 5階講堂

講 演 From Atomic Physics to Surface Science

Kai Siegbahn 教授

(スウェーデン, ウプサラ大学)

b. 地方講演会

(新潟大学理学部と共同主催)

日 時 昭和63年10月4日(金)午後3時30分～5時(開場3時)

場 所 新潟大学理学部合同講義室(B棟3階337号)

講 演 電波天文学これから10年

国立天文台野辺山電波天文台 教授 森本雅樹

c. 第34回定例講演会

日 時 昭和63年12月10日(土)午後2時～5時(開場1時30分)

場 所 上智大学中央図書館(L号館)9階

講 演 ニュートリノ天体物理学その誕生と将来

東海大学理学部 教授 小柴昌俊

映 画 ニールス・ボーア

3. 仁科記念奨励金

- a. 対 象: 「生体および環境試料におけるアクチニド・長半減期核種の低レベル測定」に関する第2回国際会議

1988年5月15日～5月20日

秋田市文化会館において

金 額: 1,000,000円

代表者: 秋田大学医学部教授 滝澤行雄

参加者: 国内30名, 国外70名

- b. 対 象: 第2回日中生物物理学会

1988年5月16日～20日

京都会館において

金 額: 1,500,000円

代表者: 京都大学理学部教授 寺本英

参加者: 国内50名, 国外30名

- c. 対 象: 重イオン物理と宇宙物理の諸問題

1988年7月21日～7月23日

理化学研究所レーザー棟及び東京大学原子核研究所講堂において

金額：1,000,000円

代表者：東京大学原子核研究所教授 野村 亨

参加者：国内115名, 国外30名

d. 対象：原子核のクラスター・ダイナミクスについての札幌国際シンポジウム

1988年8月1日～8月3日

北海道大学学術交流会館において

金額：1,500,000円

代表者：北海道大学理学部助教授 赤石 義 紀

参加者：国内37名, 国外27名

e. 対象：コンプレックスな物理系における動的協力現象に関する湯川国際セミナー

1988年8月24日～8月27日

日本クリスチャンアカデミー関西セミナーハウスにおいて

金額：1,000,000円

代表者：京都大学基礎物理学研究所 高山 一

参加者：国内88名, 国外25名

f. 対象：第2回日中セミナー「原子分子物理学」

1988年10月16日～10月21日

日経連人材開発センターにおいて

金額：1,000,000円

代表者：宇宙科学研究所教授 高柳 和 夫

参加者：国内26名, 国外12名

4. 研究者の海外派遣

昭和63年度海外派遣研究者

東京大学教養学部化学教室助手 錦 織 紳 一

留 学 先 National Research Council of Canada

研究目的 金属錯体をホストとする包接化合物の化学

東京大学理学部物理学教室 博士課程3年 松 尾 泰

留 学 先 Department of Physics, University of Chicago

研究目的 ひも理論の幾何学的量子化

2年目継続

東京大学教養学部 博士課程3年 原 隆

留 学 先 ニューヨーク大学クーラン研究所 (米国)

研究目的 構成的場の理論及び厳密統計力学

東京大学大型計算機センター助手 吉 永 尚 孝

留 学 先 オックスフォード大学 (英国)

研究目的 16重極の自由度と相互作用するボソン模型

5. そ の 他

Publication No. 29. [ニールス・ボーア：「国連への公開状，1950年」] を出版した。

談話室

仁科記念財団の広報誌“NKZ”の創刊後まもなくの頃には、談話室欄を数々の貴重な文章が飾っていました。たとえば第2号の長岡治男氏（当時理化学研究所理事長）の「理研の現状と抱負」、第3号の山崎文男氏（当時仁科記念財団常務理事）の「アイソトープとともに10年」、第5号の我妻栄氏（当時仁科記念財団理事）の「頭脳労働はタダか？」等。降って第15号にも、茅誠司、瀬藤象二、中泉正徳3氏の座談会（山崎文男氏司会）の「アイソトープ協会の創業の前後」、第18号の「ドイツからの引上げ船上の手紙、朝永博士から仁科博士へ、1939年9月13日、靖国丸船上ニテ」のような資料的に注目すべき記事が載っております。財団では、来年迎える「仁科生誕百年」にそなえて史料室の整備に励んでいますが、今回、復活した「談話室」欄に、資料の一端を載せて、関心をお持ちのかたに読んでいただくことにいたします。

コペンハーゲン時代の仁科手記

「理研OB会会報」第28号所載、竹内 一「理究3号館に保存されていた仁科資料について」に掲げられている写真2葉（15-16ページ）

$$I = \frac{(\frac{1}{2}\pi h)^6 e^4 v^{12}}{4 m^2 c^4 \lambda^2 K^2 2^2} \frac{1}{2(2\pi h)^6} \left(1 + \frac{m c^2}{E'}\right) \frac{E'}{m c^2 v'} \left[\overbrace{\alpha^2 [E]}^{2\alpha^2} + \frac{1}{2} (1 - \beta u')^2 (u' \frac{c}{\lambda})^2 \right] \quad 11.$$

$$E' = h\nu - h\nu' + m c^2 = h(\nu - \nu') + m c^2$$

$$\frac{E'}{h} = (\nu - \nu') + \frac{m c^2}{h} = \kappa - \frac{m c^2}{h}$$

$$E' + m c^2 = h(\nu - \nu') + m c^2 = \kappa h$$

$$I = \frac{e^4}{m^2 c^4 \lambda^2} \frac{v^{13}}{v^2} \frac{1}{8} \left(\frac{E'}{m c^2} + 1 \right) \frac{1}{\kappa} \times \kappa$$

$$= \frac{e^4}{m^2 c^4 \lambda^2} \frac{v^{13}}{v^2} \frac{1}{8} \frac{\alpha^2 (1 + \beta)}{(2 + 2\beta + \alpha^2)}$$

unpol. light

$$I = 2 I_D \cdot \frac{1}{4} \frac{\alpha v}{\kappa} \times \frac{\alpha v}{\kappa} \times \left\{ \frac{\nu}{\nu'} + \frac{\nu'}{\nu} - (1 - \beta u')^2 \right\}$$

$$= I_D \left\{ \frac{\nu}{\nu'} + \frac{\nu'}{\nu} - (1 - \beta u')^2 \right\} \frac{1}{1 + \beta u'}$$

$$= I_D \left\{ 1 + \frac{\frac{\nu}{\nu'} + \frac{\nu'}{\nu} - 2}{1 + \beta u'} \right\}$$

$$= I_D \left\{ 1 + \frac{\alpha^2 (1 - \beta u')^2}{(1 + \beta u')^2 (1 + \alpha(1 - \beta u'))} \right\}$$

$$I = \frac{e^4}{m^2 c^4 \lambda^2} \frac{v^{13}}{v^2} \frac{1}{8} \frac{\alpha v}{\kappa} \left[\alpha^2 [E] + \frac{1}{2} (1 - \beta u')^2 (u' \frac{c}{\lambda})^2 \right] = \frac{1}{\dots} \left\{ \dots \right\}$$

$$\therefore I = I_D \left\{ 1 + \frac{\alpha^2 (1 - \beta u')^2}{(1 + \beta u')^2 (1 + \alpha(1 - \beta u'))} \right\}$$

2. “Klein-Nishina の式”の結果が出たところを示すノートの一部。最下段の式は、Dirac の式に対する補正の形で表現されている。

木村健二郎・藤岡由夫両博士の対談から

史料室には、仁科博士と一緒に仕事をされた研究者十数名に藤岡博士がインタビューしてとった録音テープが保存されており、その聞き書きノートが作られつつあります。木村博士は、永年、財団の評議員としてご尽力くださいましたが、昨年10月12日に逝去されました。この対談で、博士は、ほかのかたからは聞くことのできない貴重なお話をしておられます。

対 談

木村健二郎・藤岡由夫

1975年6月3日

日本アイソトープ協会において

藤岡 木村先生におうかがいしたいのは、コペンハーゲンで仁科先生と一緒にいらっしやいましたから、その頃の様子、それから理研のサイクロトロンで、いろいろな化学分析をやっておられたので、そのことを主として、その他御記憶のことを何でも記録しておきたいと思っているのですけど。

木村 仁科さんのコペンハーゲンの時代のことは、Isotope News という雑誌が出ていますね、これの1969年2月から6月まで5回書きましたんです。それに大体書いたと思いますけど……これなんです。

藤岡 ちょっと拝見。それではこれを引用させていただければ……

木村 ええ。私がコペンハーゲンへ行ったのは1925年でございますけど、仁科さんはその前から行ってましてね。そしてもうあそこで仕事をしてました。仕事は希土類元素のLの吸収をやってましてね。これは相当大きなものがもうでき上がってまして、それから……

藤岡 希土類元素の何の吸収？

木村 希土類元素のX線の吸収です、X線のL吸収ですね。その仕事と、それから

もう一つはハフニウムの定量をやるのに、あそこにX線の方でコスターという人がいたわけです。コスターのやりましたのがまあ一番初めなんですけれども。ハフニウムとジルコニウムの分離ができないもんですから、それを分離しないで分量を知るという目的でX線のスペクトルを使ってやりましたんです。そのときにすぐ隣り合っている元素というんで、試料の中にタンタルを入れまして、タンタルの $L\alpha_1$ と、ハフニウムの $L\alpha_1$ との強さを比較したんです。それでやったんですけど、それがうまく行くこともあるし、なかなかうまく行かないこともあるんです。その理由の一つは両方とも $L\alpha_1$ を比較してますから、隣り合っているといてもスペクトル線は相当離れているわけです。ですから条件がなかなかうまく合わないんでしょう。それで、いろいろおかしなことが出て来たわけですね。仁科さんはもうコスターがいなくなったあとで、それに手を付けましてね、そういう離れている線を比較しないで、非常にくっついている線を比較するというのを思い付いたんです。くっついている線なら、いろんな条件に影響されることが少ないだろうと考えたわけですね。それで71番のルテチウム、これは隣ですけど、隣ということは必ずしも必要ないんですが、71番のルテチウムをつかいまして、ルテチウムの線とハフニウムの線の隣合っている線を比較する、そういうやりかたでやったんです。

これはつまり、その後、分光分析において、標準の物質を添加してやるというやり方の一番先祖になったわけですから、これは私は分光分析の方では相当重要な仕事だったと思ってます。そんな仕事をもうすでにやってしまっておられたんです。それであそこで大分重く用いられていたんです。それから何か話によると、仁科さんは私が着く頃にはもういないだろうという話だったんです。だけど行ったらまだ居ましてね、そして大変お世話になりました。それに仁科さんは御承知のように大変語学が上手ですからね……

藤岡 語学が何ですって？

木村 語学が達人なんです。デンマーク語をもうすっかりおぼえてましてね。私をつれて、新聞の広告をたよりに下宿さがしをしてくれましてね。それをみんなデンマーク語で応対して、研究所の近所を数軒まわりましたね、研究所の近くにへやをみつめてくれましてね。結局そこに入ったわけですけど、非常に親切にして下さい

ました。仁科さんは、私がいつも感じているのは、非常に親切にしてくれても、それを別に恩に着せるというようなことがないんですね。そのことを非常に感銘深く思っているんです。私はもちろんそのときデンマーク語ができませんし、「仁科さんがいなかったらどうなったんだろう」といいましたらね、「なに私がいなかったら誰かデンマーク人がやってくれますよ」と言ってね、ちっとも恩に着せるようなところがなかったですね。

藤岡 高嶺さんはも一緒に行かれたんでしょ。

木村 ええ、高嶺さんは、仁科さんより前に、ずっと前に一ペン行かれましてね。それからその後、二度目にわれわれがいるときに来られたんです。

コペンハーゲンには、今なら十数時間で行ける日本から非常に近い国になりましたけど、その頃はとにかく船でスエズをまわって、40日かかってマルセイユに着いて、それからまた汽車に乗って行ったわけですから、まあ40何日かかってやっと着いたわけですね。

藤岡 日本から直接行かれたんですか……ほかはどこかにお寄りになって……？

木村 私は直接行きました。マルセイユからパリに泊って、それからベルリンに泊まって、二泊して、それから行ったわけです。それからその頃はね、コペンハーゲンに日本の大使館も何もないんです。それに第一日本人がいないんですよ。だから仁科さんと私たち、つまりまあコペンハーゲンの研究所にいる日本人だけが在留日本人なんです。外交機関がないわけですね。名誉領事という人がデンマーク人でいたんですけど、その人は本当に名誉領事で、別に日本から手当をもらっている訳でも何でもないですから、そういう事務的なことは何もしないわけです。スエーデンのストックホルムにある日本大使館が兼ねてやってる訳なんです。そんな状態でね、今はまあ大変日本人でごった返していますけれども、そんなような時代でした。だからね、つまりわれわれが日本人の代表みたいなことになっちゃうんです。そのころはデンマークとタイとは非常に密接な関係がありまして、タイの人は若干いたんです。研究所にはいなかったんですけどね。それは、タイの海軍関係がデンマークを師匠としたらしいんです。デンマークからいろいろ教えを乞うたらしいんです。

藤岡 タイの何？

木村 タイの海軍です。そういう関係で、タイの人はちょっといましてけど。日本人はあまりいないんですね。だから、日本人というものに対するイメージがありません。デンマークの人には、日本人は小さくて、中国人は大きいと思っています。それで、仁科さんと僕が歩いてますと、仁科さんは日本人だっているんですね。そして僕は中国人だっているわけ。そういうような、あまり日本に対する知識のない時代でしたけど。仁科さんは非常にデンマークの人に評判がよくてね。ああいう気質の人ですから、非常に皆に好かれてね。日本に対するよい印象を与えるという上でも、仁科さんは非常に役に立っていると私は思っているんですよ。

木村 ところで、私は、はじめ化学をやったんです。そのときいましたヘヴェシーについてハフニウムのことをちょっとやりました。ヘヴェシーはまもなくドイツのフライブルクに招かれて行きましたんですね。私はそのときX線の分析をおぼえなかったもんですから、コペンハーゲンに残りました。ところが、X線の部屋は、コスターはもう僕が行った時にはいなかったんです。それで、仁科さんとインドのレイという人と二人がX線をやってました。レイという人はまもなく国に帰りましたから、仁科さんだけになりましたんですね。そんなわけで、私はX線は仁科さんに教えてもらったんです。仁科さんに手ほどきしてもらいまして。それからそのうちに青山新一さんが来られてね。青山さんもX線をやりたいと言うんで、青山さんと三人でいろいろな、塩素だとか硫黄だとかそういったものの、X線の吸収スペクトルを取って見たんです。そして化合物によってどういう変化があるかということを見た訳です。それで錯塩なんかをすこし手がけましてね。そして塩素が錯塩の配位子の中に取り込まれているものと、外にあるフリーのものとどうちがうかということを見たいと思いましてね。そういう仕事をしまして。それがまあまとまりまして発表したわけです。その理論的なことは、すべて仁科さんがやりました。それに、仁科さんは非常に器用で、実験上手なんです。この仕事をやってる間に、仁科さんは、「私はこれでもう実験やめる」って言っておられました。1927年頃ですね。「理論のことをやって国へ帰りたい」とそう言っておられました。それでこの仕事

が仁科さんの実験の最後に、コペンハーゲンにおける実験の最後になる訳です。

藤岡 その論文は？

木村 ええ、それは……これね……これがそれなんです。

藤岡 ちょっと拝見。Zeitschrift の1927年ですね。青山さん、木村さん、仁科さん。X線の吸収スペクトルの化学結合との関係というわけですね。Die Abhängigkeit der Röntgenabsorptionsspektren von der chemischen Bindung……。

木村 ええ、これが仁科さんの実験の仕事のおしまいなんです。これからあと、ちょっとコペンハーゲンを離れましたけど、また帰って来られて、そして Klein-仁科の式を出したんです。

藤岡 しかしそれまでにずい分理論の研究を自分でしておられたんでしょうね。

木村 ええ、そう思います、もちろん。

藤岡 あるいはどうですか、理論のコロキウムみたいなものはあるんですか。

木村 ええ、あるんです。それにはかならず出ておられました。もちろんコペンハーゲンの大学ですから、デンマークの学生にはデンマーク語で講義はされてますけど、ポーア先生のところの Institute のコロキウムは英語がおもですね。仁科さんはそれにはかならず出ておられましたから、もちろん理論に対しては非常に深い関心を持っておられたわけです。

で、仁科さんがどうしてコペンハーゲンに行かれたかというのは、ポーア先生の講演をイギリスで聴いたのか、ドイツで聴いたのか、そこところを僕ちょっと忘れちゃったんですけど、ゲッティングゲンであるか、あるいはイギリスであるか、どこかで聴かれたんですって。ポーア先生の講演を聴いて、どうも良くわからないことがあるって言うんですよ。それでね、この先生にひとつ取っ組んでみようという気を起こしたってね、そういうことを私に言っておられたことがあります。わからないってどういう意味か、そのところは僕自身よくわからないんですが。まあとにかく、その講演で非常にポーア先生に対する関心というか興味というかを持つようになったってことはたしかですよ。

それでね、ポーア先生という方はわれわれが行った時はもう非常に忙しくなっておられましたけど、それでも実に親切でした。高嶺先生がはじめに行かれた頃は、これはもう毎日のようにポーア先生と話ができたらしいんです。われわれより前の

時代ですね。で、高嶺先生が二度目に来られた時は、そういう期待をもって来られたらしいんですが、ポーア先生はもう忙しくなっちゃってるから、そう毎日話をするって訳にはとても行かなくなっちゃってるんですね。それで高嶺先生はちょっと当てがはずれたようでしたけどね。しかし、われわれから見ると、そういう忙しいなかでも、実にていねいに指導されました。それから論文がでかかりますとね、かならず、差し向かいで、非常にこまかく検討されました。それは理論の問題ならもちろんそれで良いんですけどね。僕の実につまらない、まったく分析の論文、ハフニウムの定量をX線でやりましたものですが、これは先ほど申し上げたコスト・仁科の方法があるんですが、それをまあいくらか、化学者の目で見ても改良した、つまらないこんな数ページのものがあるんですが。これなんかで上がった時、こういう全く専門ちがいの分析の論文ですけど、これをやはり、ポーア先生はちゃんと僕と差し向かいで、僕があんまり語学ができないから心許なく思われたのか何だか、仁科さんとなりにおいてね、これをちゃんと逐一ごらんになったんです。非常にていねいです。つまり自分のところから出すものに対して責任をもっておられるわけですね。それで説明を求められて。ポーア先生という方は、大変えらい方だと思いました。そしてこれにも書いておきましたけど、よく皆をティスビレというところにある別荘に招待されて、話をされました。ティスビレにはポーア先生のかくれ家があつてね。あなたの訳されたものにも書いてあるかも知れないけど……、わらぶきの家でした。

仁科さんは、コペンハーゲンの下宿は素人下宿ですね。そこを一部屋借りましてね、そこに住んでおられて、朝飯と晩飯はそこで食べてたんです。で、昼飯は、デンマーク風のサンドイッチですね。パンを切った上に肉や野菜や魚を、大体あの、前の日の夕食の残りです。それをのせて、そしていちいちそれをパラフィン紙でくるむんですよ。私もそうなんですけどね。それをお昼に持って来て。それから紅茶と砂糖を自分で買って、お湯を実験室で沸かして、そしてまあ少数の者で食べてましたけどね。非常に簡素な生活をしてました。それで、非常によく勉強しました。よく実験が遅くなって門が閉まっちゃつてね、垣根を乗り越えて下宿に帰ることがあるんです。仁科さんは研究室の鍵をもらってましたから、研究室から出ることはい

いんですが、門の鍵はないもんだから、垣根を乗り越えて出なくちゃならない。よくそういうことが続いているものですから、ポーア先生が、「実験だからそんなに続くのか」とおっしゃるんですね。「理論じゃとてもそういう風に毎晩続けるわけにはいかない」って、言われたことがありましたんですけどね。ポーア先生自身もやはりいろいろ雑誌を読まれるし、非常にくたびれるんですね。それで週末になると、目に見えてくたびれるようになりまして、それからティスビレに行かれて、月曜に帰って来られるとまた生き生きとしてね。だから、研究の方もあるし、雑用もあるし、先生はずい分忙しいし、非常にお疲れになっているようでしたね。

* * * * *

藤岡 それじゃこれで。こんどは日本に帰ってからの話にしましょう。理研に仁科研究室ができたのは昭和6年ですが。

木村 私は理研は兼務ではいっておりました。はじめからじゃなく、帰ってしばらくして、いつだったかいまハッキリしないんですけど。仁科さんがサイクロトロンをつくって、ウランに中性子をあてる仕事をはじめたでしょ。あのときに……そのすこし前に仁科研究室で（核反応でつくって）できたものを、いろいろ分析する仕事をたのまれて、つまりできた核種がどういう化学元素であるかということをつきとめる仕事をたのまれましたね。わたしの研究室にそのころ井川正雄さんという人がいました。井川さんというかたは京都の高等工芸専門学校でしたか——そこを卒業されたかたで、旭硝子で化学分析の仕事をやっておられたんです。非常に分析の上手なかたで、旭硝子を退職されたあと、田丸節郎先生が旭硝子と関係があったりで、東京工業大学へつれていかれて、その物理化学の先生だった永迫さんのところへ入れたんです。井川さんというかたは化学分析が好きで、旭硝子を退職してからあとは、植木いじりでもしてりゃいいんですが、その植木いじりのかわりに化学実験をやりたいという人なんですね。このかたが永迫さんのところへはいったんですけど、永迫さんがいうには、“井川さんがわたしのところへ来たけれども、わたしのところではどうも宝のもちぐされになる。あなたのところへ引きとってほしいか”とそういわれるんです。それで、おいで願ったんです。非常に分析が上手で、非常に役に立つんです。嵯峨根さんが作ったものだとか、嵯峨根さんがアメリカか

らもってきた長寿命のものなどの **chemical identification** をやったりしました。こんどは仁科さんのほうでサイクロトロンでウランやトリウムに中性子をあててできたものをしらべるといようなときに、井川さんの技術が非常に役に立ったわけです。その研究で仁科さんが速い中性子を使ったというのは一つのよかった点じゃないですかね。当時外国では大体、遅い中性子をあてている人が多かった。その中で仁科さんが速い中性子をぶつけて、ウランやトリウムからできてくるものをしらべたわけです。そのおかげでウラン-237がみつかったわけです。これは $(n, 2n)$ 反応でできてますね。

藤岡 $(n, 2n)$ 反応でね……

木村 それから、速い中性子による場合にはちょうど質量数の真中ごろのところに **fission products** のいろいろなものがみつかりまして……。銀、カドミウム、インジウム、錫、アンチモンといったようなものです。速い中性子でこのような核分裂生成物を見つけたことは面白い結果だったと思いますけど。

ウラン-237のほうでは、これは β 線を出しますから93番元素ができてははずなんです。93番元素をさがすということにとりかかったんですけど、これがなかなかうまくいかなかったんです。この93番元素をさがすということは、じつをいうと、コペンハーゲン時代からやってたことでもあるんです。

藤岡 そうですか。

木村 ええ、仁科さんがね。72番のハフニウムについては、その発見は、ボーア先生の原子構造論の証明になる実験ですから、このことに対してはボーア先生は非常に深い関心をもっておられたわけです。だけどそのころ、まだほかにみつからない元素が、43番とか61番とか75番とか、あるいは85番とか、あったわけですけど、そういうものに対しては、ボーア先生はあまり関心をもっておられないんです。72番に対してはご自分の理論の証明になることで、非常に関心を払っておられたけれど、そのほかのは、ただ周期表のあいているところへ一つ二つ入れるだけで、それ以上の深い意味がないというようにお考えになっていたわけです。ただ93番に対しては、これはまた相当興味をもっておられた。それは5fの電子配置がどこから始まるかという問題なんです。いまでは、5fの電子配置がアクチニウムの所から……

ということになっていますけれど、そのころは、そうは考えていなかった。ずっと順々にウランのところまで、化学的に似たものが、Ac, Th, Pa, U というふうに並んでいますから、ウランのところでは5fは始まっていない、というのがそのころの一般の考えかただったんです。それで、ことによると93番あたりから、あるいはウランあたりから、5fの電子配置が始まるかも知れないと、そういうふうと考えられるわけなんです。だから93番の搜索ということは、ポーア先生も多少興味をもっておられまして、ウランのなかに93番あるいは94番があるんじゃないか、それならばウランをしらべたら93番とか94番とかがみつかる可能性があるというふう考えられて、ウランのいろいろな昔の由緒のあるサンプルを集められたんです。そしてそれらの中に93番元素あるいは94番元素があるかどうかやってみろということを仁科さんにいつけられたんです。わたしもその仕事のすこし——これは成功しなかったから発表してない仕事なんですけれども——化学の仕事をおたすけしたことがあるんですけど、うまくいきませんでしたね。まあそのころのX線の分析の鋭敏さからいうと、それは無理だと思うんですけど……。そのうちに杉浦君がきてましてね、杉浦君が勘定しまして、5fの電子配置がでてくるのはもっと後だという勘定になったんです。それはデータもたくさんないから、無理なんですけれどね。それじゃあまあ、ウランをつついても仕方がないからやめようということでその仕事はやめになっちゃって、発表もしないで蔵にしまっただけなんです。

それから、ほかの元素も、例えば61番が見つかったとか、何かそういうことがありますと、コペンハーゲンにサンプルを送ってくるのがあるんです。”自分は中に61番があると思う”とか“43番があると思う”といって、送ってくるんです。それでそれをしらべるのがまた仁科さんの仕事なんです。それらはみんな、仁科さんが見たかぎりでは、ひとつもチャンとしたものはなかったんですが。有名な人でアウアー・フォン・ウェルスバッハという希土類の大家がおりますが、この人が61番があるんじゃないかといって送ってきたのがあります。それからイタリアのローラという人も送ってきたのがあります、61番じゃないかといって。それらは二つともなかったんです。そういうふうには、送ってくる試料の分析というようなことも、X線による分析法で仁科さんがやりました。

そういうような因縁で、93番というのは関心があったわけです。ウラン-237が β 線を出していますから、できたものは93番になるはずですから、その93番元素を探そうということになりました。それで、これはぼくの考えのいたらなかった点なんですけれども、そのころはやはり5fの電子配置がずっと前から始まっているなんてことを、誰もみな考えてなかったんですから、周期表を順々にみていきますと、93番、……の上はレニウム、オスミウムなんかになるわけです。ですからぼくはオスミウムを担体にいれまして、オスミウムと一緒に93番をとろうと思ってやったんです。そしたらそれがうまくいかない。だめなんですね。アメリカでは、セグレが遅い中性子をあててやっています。セグレのつくったのは239のほうなんです。仁科さんのほうは237なんです。セグレも239について、やっぱりオスミウムを担体にしてやっているんです。で、やっぱりうまくいかないんです。結局一番しまいになって、Abelsonたちが、もう5fはもっと前から始まっているのだと考えて、白金とかオスミウムのようなまるでちがったものじゃなくて、むしろウランに似ているものだと、そういうふう考えたわけです。そういう考えかたでやって93番元素をみつけているわけです。

木村 まあそういうことで仁科さんとコペンハーゲンと一緒にいたおかげで、日本へ帰ってからも一緒に仕事をすることができました、面白い結果も出ましたし、わたしとして非常に幸いだったと思っています。

藤岡 それはあの小さなサイクロトロンですね。

木村 ええ、小さなサイクロトロンです。

藤岡 大きなサイクロトロンは？

木村 大きなサイクロトロンはわたしはいじってないです。あの小さなサイクロトロンは、ずいぶん化学のほうでは役に立ったと思います。

「財団法人仁科記念財団設立趣意書並びに寄附行為」(抄)

委大第164号

財団法人 仁科記念財団
設立代表者 渋 沢 敬 三

昭和30年11月10日付で申請のあった財団法人仁科記念財団の設立を民法第34条によって許可します。

昭和30年12月5日

文部大臣 清 瀬 一 郎

財団法人仁科記念財団設立趣意書

文化勲章受賞者、日本学士院会員故仁科芳雄博士は、わが国の原子物理学の創始者であり、湯川博士等、世界的学者の育ての親でありました。博士が戦前、当時世界で第一級の大サイクロトロンを建設されたことは、そのサイクロトロンの悲劇的最後までともに、あまねく世に知られているところであります。

故仁科博士は、世界的な原子物理学者であったのみならず、戦後国歩艱難の時期に際しては、旧財団法人理化学研究所を潰滅の危機から救って株式会社科学研究所を興し、科学技術こそ国の経済復興の原動力であるという信念を貫かれ、身をもってこれを実践されました。博士はまた、その学識と円満な人格によって世界の学界の信望を一身にあつめられ、博士の存在がわが国の国際社会へのすみやかな復帰に大きな助けとなったことも、永く忘れることのできない点であります。

おもうに科学技術の振興は、国の自立復興上、万難を排して成し遂げなければならぬ喫緊事であります。なかんずく、博士が生前心血をそそがれた原子物理学が、人類文明にとっていかに重大な影響を与えつつあるかは、万人のよく知るところであります。原子力の重要性はいうまでもありませんが、原子物理学は今日先進諸国においては、生物学、工学、農学、医学等に広く応用されるほか、生産技術の方面

にも根本的変革をもたらしつつあり、この分野の著しい立ち遅れを克服することは、わが国の当面する重要課題の一つであります。

以上の趣旨により、今回私共は故仁科博士を記念し、原子物理学とその応用に関する研究の振興を目的として、仁科記念賞の授与、研究奨励金の交付、海外学者の招聘、研究者の海外派遣、記念文庫の設置、記念講演会の開催等の事業を行うために、広く各界からの御寄附を仰いできましたところ、国内および海外各方面から多数の方々の御賛同をえて、ここに2000万円に達する募金をみるに至りました。「仁科記念財団」はこの寄附金と故博士の蔵書とをもって設立されるものであります。

昨今わが国においても原子力の平和利用が声高く叫ばれておりますが、その健全なる発展は基礎科学とその応用との調和なくしてはこれを望むことはできません。この調和こそ故博士の理想とせられたところであり、本財団は必ずやその成果を挙げ、わが国科学技術の発展に寄与するのみならず、世界の原子物理学の進展に貢献せんとするものであります。

財団法人仁科記念財団寄附行為（抄）

第1章 総 則

第1条 この法人は、財団法人仁科記念財団という。

第2条 この法人は、事務所を東京都文京区本駒込2丁目28番45号におく。

第2章 目的および事業

第3条 この法人は、故仁科芳雄博士のわが国および世界の学術文化に対する功績を記念して、原子物理学およびその応用を中心とする科学技術の振興と学術文化の交流を図り、もってわが国の学術および国民生活の向上発展、ひいては世界文化の進歩に寄与することを目的とする。

第4条 この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

1. 原子物理学およびその応用に関する研究において、きわめて優秀な成果を収め

た者に対する仁科記念賞の授与

2. 原子物理学およびその応用に関する仁科記念講演会の開催
3. 原子物理学およびその応用に関する図書を蒐集公開する仁科記念文庫の経営
4. 原子物理学およびその応用に関する研究を行う研究機関および個人に対する仁科記念奨励金の授与
5. 原子物理学およびその応用に関する研究を行う学者の招聘および海外派遣
6. 原子物理学およびその応用に関する知識の普及を目的とする出版物の刊行
7. その他前条の目的を達成するために必要な事業

第3章 資産および会計

第5条 この法人の資産は、次のとおりとする。

1. この法人設立の当初に仁科記念財団設立発起人会が寄附した別紙財産目録記載の財産
2. 資産から生ずる果実
3. 事業に伴う収入
4. 寄附金品
5. その他の収入

第6条 この法人の資産を分けて基本財産および運用財産の二種とする。

基本財産は、別紙財産目録のうち基本財産の部に記載する資産および将来基本財産に編入される資産で構成する。

運用財産は、基本財産以外の資産とする。ただし、寄附金品であって寄附者の指定あるものは、その指定に従う。

第7条—第10条 略

第11条 この法人の決算は、会計年度終了後2ヶ月以内に理事長が作成し、財産目録、事業報告書および財産増減事由書とともに監事の意見をつけて理事会の承認を受け文部大臣に報告しなければならない。

この法人の決算に剰余金があるときは、理事会の議決を経て、その一部または全部を基本財産に編入し、あるいは翌年度に繰越すものとする。

第12条—第13条 略

第4章 役員、評議員および職員

第14条 この法人には、次の役員をおく。

理事 20名以上25名以内（内理事長1名，常務理事3名以内）

監事 2名以上4名以内

第15条 理事および監事は、評議員会でこれを選任し、理事は、互選で理事長1名，常務理事3名以内を定める。

第16条 理事長は、この法人の事務を総理し、この法人を代表する。

理事長に事故があるとき、または理事長が欠けたときは、理事長があらかじめ指名した常務理事が、その職務を代行する。

常務理事は、理事長を補佐し、理事会の決議に基いて日常の事務に従事する。

第17条 理事は、理事会を組織し、この法人の業務を議決し執行する。

第18条 監事は、民法第59条に定める職務を行う。

第19条 この法人の役員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

補欠による役員の任期は、前任者の残任期間とする。

役員は、その任期満了後でも、後任者が就任するまでは、なお、その職務を行う。

役員は、この法人の役員たるにふさわしくない行為のあった場合、または、特別の事情のある場合には、その任期中でも評議員会および理事会の議決によってこれを解任することができる。

第20条 役員は、有給とすることができる。

第21条 この法人には、評議員60名以上70名以内をおく。評議員は、理事会でこれを選出し、理事長が委嘱する。評議員には、第19条を準用する。この場合には同条中「役員」とあるのは、「評議員」と読み替えるものとする。

第22条 評議員は、評議員会を組織し、この寄附行為に定める事項のほか、理事会の諮問に応じ、理事長に対して助言する。

第23条 この法人に顧問若干名をおくことができる。顧問は、理事会でこれを選出

し、理事長が委嘱する。

顧問の任期については第19条を準用する。この場合には、同条中「役員」とあるのは、「顧問」と読み替えるものとする。

第24条 この法人に事務を処理するために書記等の職員をおく。

職員は、理事長が任免する。

職員は、有給とする。

第5章 会 議

第25条 理事会は、毎年2回理事長が招集する。ただし、理事長が必要と認めた場合、または理事現在数の3分の1以上から会議の目的事項を示して請求のあったときは、理事長は、臨時理事会を招集しなければならない。

理事会の議長は、理事長とする。

第26条 理事会は、理事現在数の3分の2以上が出席しなければ議事を開き議決することができない。ただし、当該議事について書面をもって、あらかじめ意思を表示した者は、出席者とみなす。理事会の議事は、この寄附行為に別段の定めがある場合を除くほか、出席理事の過半数をもって決し、可否同数のときは議長が決する。

第27条 次に掲げる事項については、理事会において、あらかじめ評議員会の意見を聞かなければならない。

1. 予算および決算に関する事項
2. 不動産の買入れ、または基本財産の処分に関する事項
3. その他この法人の業務に関する重要事項で理事会において必要と認めた事項

第25条および前条は、評議員会にこれを準用する。この場合には、第25条および前条中「理事会」および「理事」とあるのは、それぞれ「評議員会」および「評議員」と読み替えるものとする。

第28条 すべての会議には、議事録を作成し、議長および出席者代表2名が署名捺印した上で、これを保存しなければならない。

第6章 寄附行為の変更ならびに解散

第29条 この寄附行為は、理事現在数および評議員現在数のおおの3分の2以上の同意を経、かつ、文部大臣の認可を受けなければ、変更することができない。

第30条 この法人を解散するには、理事現在数および評議員現在数のおおの4分の3以上の同意を経、かつ、文部大臣の許可を受けなければならない。

第31条 この法人の解散に伴う残余財産は、理事全員の合意を経、かつ、文部大臣の許可を受けて、この法人の目的に類似の目的を有する公益事業に寄附するものとする。

第7章 補則

第32条 この寄附行為の施行についての細則は、理事会の議決をもって別に定める。

付 則

第33条 この法人設立当初の理事および監事は、次のとおりである。

理事(理事長)	渋 沢 敬 三	理事(常務理事)	朝 永 振一郎
理事(常務理事)	村 越 司	理事	石 川 一 郎
理事	植 村 甲午郎	理事	亀 山 直 人
理事	酒 井 杏之助	理事	瀬 藤 象 二
理事	原 安三郎	理事	藤 山 愛一郎
理事	我 妻 栄	監事	茅 誠 司
監事	武 見 太 郎	監事	二 見 貴知雄

昭和34年6月1日 一部(事務所所在地)変更認可

昭和41年11月8日 一部(理事および評議員の定数)変更認可

役 員 名 簿

(平成元年 3 月現在)

理 事 長	久保 亮五						
常 務 理 事	鎌田 甲一	玉木 英彦	宮崎友喜雄				
理 事	安藤 豊禄	伊藤 昌壽	井上 薫	太田 清蔵			
	小田 稔	鹿島 昭一	佐波 正一	鳩山 道夫			
	浜田 達二	林 主税	原 禮之助	平岩 外四			
	堀田 庄三	三浦 功	三田 勝茂	森 英雄			
	山村 雄一	渡里杉一郎					
監 事	池田 長生	小山 五郎	佐々木秋生	瀬川美能留			
評 議 員	有山 兼孝	安藤 豊禄	飯尾 正宏	池田 長生			
	伊藤 昌壽	井上 薫	岩佐 凱夷	植村 泰忠			
	江口 禎而	江戸 英雄	太田 清蔵	岡本 耕輔			
	小田 稔	鹿島 昭一	鎌田 甲一	上坪 宏道			
	久保 亮五	小谷 正雄	小林 稔	小山 五郎			
	坂井 光夫	佐々木秋生	佐田登志夫	佐波 正一			
	杉本 正雄	鈴木 増雄	瀬川美能留	関本 忠弘			
	曾田 範宗	高木丈太郎	竹内 柁	竹中 鍊一			
	田島 英三	田中 靖郎	玉木 英彦	豊沢 豊			
	中根 良平	西川 哲治	西島 和彦	仁科雄一郎			
	西村 純	鳩山 道夫	浜田 達二	早川 幸男			
	林 主税	原 禮之助	平岩 外四	弘世 現			
	福井 伸二	藤井 忠男	伏見 康治	堀田 庄三			
	丸森 寿夫	三浦 功	三田 勝茂	宮 憲一			
	宮崎友喜雄	宮沢 弘成	宮島 龍興	向坊 隆			
	森 英雄	山崎 敏光	山村 雄一	芳田 奎			
	渡里杉一郎	和田 昭允					
事 務 局	横山 すみ	和田千代子	藤森みさき				

財団法人 仁科記念財団

113 東京都文京区本駒込 2 丁目 28 番 45 号
電話 東京 03 (946) 7 1 1 1 (代表)
郵便振替番号 東京 3-135934

(1989年 6 月) 1,500